

12月第1週の礼拝説教

■日時：2022年12月4日（日）10：30－11：30 待降節第2主日

■説教：保科けい子 牧師

■説教題：「救い主である神」

■聖書：ルカによる福音書1章46～56節（新約p101）

■讃美歌：242「主を待ち望むアドヴェント（2節）」175「わが心はあまつ神を尊み、」

ルカによる福音書1章46節から56節に語られている御言葉は、見出しにも記されているように、「マリアの賛歌」と呼ばれています。この賛歌は、直前の段落に記されている、受胎告知を受けたマリアが親類のエリサベトを訪ねた時の会話が背景になっています。エリサベトは祭司ザカリヤの妻で、不妊の女と言われていたのに、年老いてから男の子を身ごもっており、マリアが訪問した時はすでに6か月になっていました。この男の子がバプテスマのヨハネで、イエス様と半年違いで生まれていることが分かります。そこで、エリサベトは、45節で「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしよう」とマリアを称えています。46節以下では、それを真正面から受け止めたマリアが「そうです。私は幸いな者です」と歌っているのです。マリアは「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」と歌い出しました。「あがめ」という歌いだしの言葉がラテン語で「マグニフィカート（あるいはマニフィカートと発音されることもあります）（Magnificat）」という言葉なので、この「マリアの賛歌」は「マグニフィカート」と呼ばれています。

その意味は「大きくする」です。「主を大きくする」それが「主をあがめる」の意味なのです。「主を大きくする」それは、言い換えれば、自分を小さくする、あるいは自分の小ささを認める、ということです。神様をあがめるためには、自分の小ささを認めてへりくだることが必要なのです。マリア自身がそれをしていることが、48節の「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです」という言葉に現れています。口語訳聖書では「この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。」と訳されていました。しかし、「卑しい」という言葉は差別語とも考えられるとして、新共同訳聖書では「身分の低い」と訳しなおされました。いずれにしてもこの言葉は、社会的地位などを表す言葉として用いられていますので、聖書もそういうことにこだわっているのか、と思われるかもしれません。けれども、ここでは「主のはしため」と結びついている言葉なので、神様との関係において身分の低い者であるということです。神様を大きくする、ほめたたえるこ

とは、自分自身をこのように神様のはしため、あるいは僕として位置づけることなのです。

しかし、そのようなマリアに主が「目を留め」て下さったのです。49節の言葉で言えば、「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから」ということです。神様のみ前で低い者、卑しいはしためでしかない者が、神様に選ばれその偉大な力によって用いられて、神様の恵みのみ業を担う者とされた、マリアはそこに自分の幸いを見えています。このことのゆえに、「今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう」と言っているのです。つまりマリアが幸いな者であるのは、神様のみ前で小さな者でしかない自分に主が目を留めて下さり、つまり選んで下さって、その御力によって偉大なことをして下さり、御業のために用いて下さったからなのです。この幸いのゆえに、彼女は全身全霊をもって神様を大きくしてほめたたえているのです。

「わたしの魂は主をあがめ」と並んで、「わたしの霊は救い主である神を喜びたたえま

す」とあります。主なる神様をあがめ大きくすることは、救い主である神様を喜びたたえることでもあるのです。キリスト教の信仰の根本には、そのように神様ご自身の存在を喜ぶ喜びがあるのです。いつも難しい顔をして頑張っていることが信仰なのではありません。この喜びは、先ほどの「幸い」と結びついています。神様からご覧になれば、本当に小さくて神様の視界に入らないような者でしかない自分に、神様が忘れずに目を留めて下さり、その御力によって偉大なことをして下さり、御業のために用いて下さる、マリアはその幸いを味わっていたからこそ、「私の霊は救い主である神を喜びます」と歌ったのです。それは、神様を自分の好きなように利用して自己実現をするというようなことではありません。自分が神様の主人になるのではなくて、神様の僕、はしためとなって、御業のために用いていただくことにこそ本当の幸いが、そして喜びがあるのです。それが、自分を小さくして神様を大きくする喜びとすることができると思います。

そして、マリアはが歌っているのは自分自身の幸いだけではありません。自分に与えられた幸いが、これからも、神様を信じて生きる多くの人々に与えられていくことを語っているのです。それが50節以下です。50節に「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます」とあります。マリアだけではなくて、神様を信じて生きる信仰者たち、すなわち「主を畏れる者」は皆、「幸いな者」となるのです。ですから、48節に戻りますが

「今から後、いつの世の人でもわたしを幸いな者と言うでしょう」というのも、マリアのことが「幸いな者」として記憶されるというだけではなくて、今から後、いつの世にも「幸いな者」が現れるということでしょう。それらの人々が自分たちの受けている幸いや喜びに感謝するときに、その幸いに最初にあずかった人としてマリアのことを思い起こしていく、ということでしょう。つまり私たちが、マリアと共に幸いな者となるのです。マリアの賛歌を読むことの意味はそこにあります。